

地域主義と軍事 - 民主化勢力の
勢力争いをめぐる金泳三の葛藤
— 金鍾泌民自党代表委員人事を中心に —

生 駒 智 一

目次

序章

第一章 三金の相関関係とその変遷

第一節 4・19 革命と第二共和国

第二節 朴正熙時代

第三節 全斗煥時代

第四節 盧泰愚時代

小結

第二章 金鍾泌人事をめぐって

第一節 金泳三大統領候補選出と金鍾泌代表最高委員就任

第二節 5・16 擁護発言

第三節 補欠選挙の敗北

第四節 金鍾泌罷免

第三章 金鍾泌の下野が意味するもの

第一節 後任人事と自民連結党

第二節 第1回地方選挙と第15代総選挙

第三節 全斗煥と盧泰愚の逮捕

終章

序章

1993年2月、キムヨンスム 金泳三はノテウ 盧泰愚派とキムジョンピル 金鍾泌派という二つの軍事勢力からの支持のもと、大統領に就任した。このうち金鍾泌は党ナンバー2である民自党代表最高委員¹⁾であった（盧泰愚は前任大統領）。

金泳三は文民出身のため、彼を大統領に選出した国民から軍事勢力の排除を要請されていた。このため、彼は民主化勢力から金鍾泌の罷免要求を受けていた。また、勢力争いのため、彼は自派およびもう一つの軍事勢力である、盧泰愚派からも罷免要求を受けていた。金泳三はこれらの罷免要求を拒否し、金鍾泌を擁護した。しかし、1995年1月、金泳三は突然金鍾泌を代表委員²⁾職から罷免、金鍾泌は離党した。

金泳三と金鍾泌は、それにキムデジュン 金大中を加えて一般に「三金」と呼ばれている。これは三人全員の姓が「金」であったからである。当時の韓国政治はこの「三金」が中心となって動かしていたため、この時代は「三金時代」とも呼ばれている。つまり、この金泳三による金鍾泌の党代表職からの罷免劇は、その韓国政治の中心人物たちによる、せめぎ合いの結果であり、この時代の韓国政治を理解する上で重要であると言える。

また、金泳三に党代表職から罷免された金鍾泌は党を離脱、新党を結成し、最終的にはもう一人の雄である金大中と連合するに至った。この連合は1998年の大統領選挙での勝利を呼び、金大中大統領—金鍾泌國務総理の誕生となった。この金泳三から金大中への政権交代は、韓国の憲政史上初となる平和的政権交代であり、1987年に民主化した韓国にとってその定着へ大きく前進した出来事であった。そうした未来の出来事を逆算して見ると、この罷免劇は韓国政治が大きく転換していくこととなる、その端緒となる事件なのである。そのことを踏まえると、現代韓国政治史の上で、この事件に着目せずに通り返ることは出来ないと言えよう。

この罷免劇の意味合いはどのようなものであったのであろうか。辻田堅次郎（1995）や平岩俊司（1996）、倉田秀也（1996）、池東旭（1995）は「世代交代」としている。「世代交代」とは元来は勢力的には優位に立ちながらも、有力な次期大統領候補を輩出できない民正系³⁾からの「金泳三後退論」であった。しかし、金泳三は大統領の任期によって自動的に引退を余儀なくされており、自身と道連れに金鍾泌を後退させようというものである。

沈之淵（2009）、イ・ダルスン（2012）、イ・ビョンソン（1995）は、「世界化推進の障害」であるとした。軍人出身である金鍾泌では世界化は出来ないというのであるが、金鍾泌の後任も軍人出身のイチュング 李春九であり、結局のところこのスローガンは金鍾泌を追放するための口実に過ぎないというものである。

どちらにせよ、金鍾泌を葬り去るためのものということである。このようにして金鍾泌を追い詰めればどうなるか。彼も三金の一角というプライドがある。党を離れ、新党を立ち上げる

ことも容易に想像がつくであろう。金鍾泌が新党を立ち上げれば、金鍾泌チュンチョンドは忠清道⁴⁾という支持基盤を持っているため一定の票を獲得するのは確実である。また、金泳三に反感を持つ民主系議員が金鍾泌の新党に流れ、一大勢力となる可能性もある。このようなことに思いをはせた時、果たして金鍾泌の罷免劇は先行研究で言われているような、金鍾泌を葬るという意味合いのものであったのかどうか疑問が残る。

本稿では、この罷免劇の政治的意味合いを探ることで、その背景にある、軍事・民主化勢力、地域主義という二軸の、この当時における韓国政治をめぐるせめぎ合いの実態を明らかにする。

このために、まず第一章で金泳三政権に至るまでの過去に立ち戻り、金鍾泌、金泳三そして金大中の「三金」の相関関係の変遷を確認する。第二章では2年間に渡り、金泳三がいかに金鍾泌を保護し続けてきたかということと、そこからの突然の罷免劇を改めて見つめる。第三章では第一章とは逆に、金鍾泌が罷免され、下野した後の時代を見つめることで、党代表時代の状況を見直す。このように、時間軸でも過去、現在、未来の三方面からこの一件の分析を図るものである。

第一章 三金の相関関係とその変遷

第一節 4・19革命と第二共和国

第二次世界大戦の終結により、日本の植民地から解放された韓国は米軍政を経て、1948年8月15日、李承晩イスンマンによる第一共和国⁵⁾が成立した。李承晩はやがて独裁者としての姿を露とした。1960年3月に行われた第4代大統領選挙⁶⁾において、野党の大統領候補であった趙炳玉チョビョンオクがその直前に死去し、李承晩の勝利は確実となった。しかし、副大統領は野党候補である張勉チャンミョンが選挙戦を有利に進め、正副大統領でのねじれ現象が懸念された⁷⁾。この事態に李承晩はありとあらゆるインチキを行い、自党候補者の李起鵬イギボンを当選させた。

これに怒った民衆は、1960年4月19日、全国でデモを起こし、李承晩を辞任に追い込んだ。この市民蜂起は、後にその日付から4・19革命⁸⁾と呼ばれるようになった。後に金泳三はこの4・19革命が自身の文民政権の出発点となったとしている〔『変化と改革 一金泳三政府国政5年資料集 1』pp.21-23〕。

この4・19革命を受けて、1960年7月、国会⁹⁾の第5代総選挙¹⁰⁾が行われ、民主党政権が成立した。しかし、反李承晩で結びついていただけの民主党は、政権をとった途端に尹潽善ユンボソン大統領らの旧派と張勉國務総理¹¹⁾らの新派の間で激しい内部対立を引き起こした。

この時、金泳三、金大中はともに既に政治活動を開始していた。二人とも民主党に属していたが、それぞれ旧派、新派に分かれていた。この後、軍事政権¹²⁾期には民主化勢力の期待のホープとなった二人は共闘も行ったが、派閥としては終始別のままであった。

第二節 朴正熙時代

不安定な政治運用が続く第二共和国に対し、これを好機と見た金鍾泌を中心とした陸軍士官学校（以下陸士）8期生らは、1961年5月、朴正熙を担いで軍事クーデターを起こした。やはりその日付から後に5・16軍事クーデターと呼ばれるものである。陸士8期生は「8期」ではあるものの、正式に陸軍士官学校になって最初に入學した期であり、自分たちこそが真の1期生であるというエリート意識があった〔木村幹（2008:94）〕。この頃、朝鮮戦争のために速成教育を受けた高級軍人たちがだぶついており、金鍾泌ら佐官クラスと将官クラスで年齢に差がなく、いつまで経っても昇進できないという鬱憤がたまっていた。このため、政権を掌握すると、金鍾泌らは先輩軍人たちを次々と肅清し、自分たちが役職の中樞を独占した。

この時、新派が軍事勢力の主攻撃目標とされたため、同派に属する金大中への取り調べは過酷なものとなり、期間も3ヶ月に渡った〔金大中（2000:87-89）〕。これにより金大中の軍事政権に対する恨みは骨髓に達した〔池東旭（2002:217）〕。一方の金泳三も取り調べを受けたが、それは金大中に比べればはるかに短い28日間に過ぎなかった〔金泳三（2006:46）〕。政治活動の解禁も金大中よりも4週間早かった。解禁後、金泳三は党スポークスマンや民衆党の院内総務など着実に政治的経歴を積み上げていったが、この院内総務職は本来金大中が就任するはずのものであった〔木村幹（2008:104-105,143）〕。このようにして、党内主流派に属し、輝かしいポストを歴任していく金泳三に対する、金大中の思いも屈折したものとなっていったのである。

1969年、朴正熙が三選禁止憲法を改正し、1971年の大統領選挙出馬を決めると、金泳三は「四十代旗手論」¹³⁾を展開し、大統領候補に相応しいのは自分であるとした。しかし、選ばれたのは金大中であった。これは軍事勢力側の、自分たちと同じ慶尚道^{キョンサンド}¹⁴⁾を地盤にする金泳三が野党候補になれば慶尚道票が割れてしまうが、全羅道^{チョルラド}¹⁵⁾の金大中ならば慶尚道票を総取りでき、自らに有利になるとの思惑からであるとも言われている。こうして、この1970年の大統領選挙から選挙で地域感情が動員されるようになった。同時に、金泳三と金大中が宿命のライバルとなったのもこの1970年の大統領選挙からである〔池東旭（2002:197-198,218-219）、森康郎（2011:72-73）、金泳三（2008:89-90）〕。

この大統領選挙で軍事勢力側の思惑通り、朴正熙が金大中に勝利した。しかし、官権、金権を総動員したにもかかわらず、薄氷での勝利であった。このため、軍事勢力側はこのまま行けば次回の選挙では金大中に負けると危機感を募らせ、彼を最大の要注意人物と認識するようになった。これが1971年5月の交通事故を装った金大中暗殺未遂事件や1973年8月の金大中拉致事件へとつながっていくこととなり、金大中の軍事勢力に対する感情もますます屈折したものとなっていくこととなった。

第三節 全斗煥時代

20年にわたる朴正熙時代は彼の暗殺事件で幕を下ろした。朴正熙大統領暗殺事件の後、つかの間のソウルの春がやってきた。金鍾泌は朴正熙の後釜として与党共和党総裁となった。金泳三は野党新民党党首に返り咲き、金大中も政治活動の自由が認められるなど、ここにいわゆる「三金」が誕生した。しかし、金泳三と金大中は対立し、野党勢力は分裂してしまう。前年に12・12クーデターを起こして軍部を掌握していた全斗煥や盧泰愚ら新軍部¹⁶⁾は、これにつけこみ1980年5月、5・17クーデターを起こした。金大中と金鍾泌は逮捕された。金大中は軍法会議で死刑判決を受け、金鍾泌は不正蓄財216億ウォンを没収された。金泳三は逮捕はされなかったが、自宅軟禁とされ、政界引退を強制された〔池東旭(2002:200)〕。

全斗煥や盧泰愚は陸士11期であった。陸士11期は朝鮮戦争終了後に陸軍士官学校が再開された最初の期であり、それまでの速成教育とは違い、4年にわたる米軍式の軍事教育を受けた。このため、自分たちこそが真の陸士1期生だとし、韓国軍のエリートを自負した〔池東旭(2002:149)〕。全斗煥は中央情報部人事課長、首都警備司令部大隊長、陸軍参謀総長副官を歴任し、同期で最初に大佐に昇進するなど、第11期の中心的人物になっていた。

これに対し、朴正熙の後継者と自他共に認めていた金鍾泌は、軍部の支援を取り付けることができず、全斗煥のクーデターに膝を屈することになった。これには、嶺南地域¹⁷⁾を主体としていた軍事勢力内において忠清道出身という出自が影響した〔池東旭(2002:148)〕。

第四節 盧泰愚時代

12・12、5・17の両軍事クーデターとそれに続く5・18光州事件¹⁸⁾を引き起こした全斗煥政権は正統性が低く、民主化運動が盛んになっていった。これを受けて、1987年6月、全斗煥は陸士11期の同志で次期大統領候補に選出していた盧泰愚に「6・29民主化宣言」を出させた。宣言には次期大統領選挙が直接選挙で行われることが盛り込まれていた。また、この宣言を受けて金大中の放免、釈放が行われた。これは、盧泰愚が漁夫の利を得る新軍部の作戦であった。つまり、金大中は復権すれば必ず大統領選挙に出馬し、野党は候補を一本化できない。結果、民主化勢力支持票は分散するというものである〔池東旭(2002:177)〕。この目論見は見事的中し、1987年12月に行われた第13代大統領選挙は盧泰愚が制した。この選挙に臨むにあたって、金泳三と金大中は当選確率を上げるため、自身の支持地域の地域感情を最大限動員した。これを受けて、盧泰愚と金鍾泌も自身の支持地域の地域感情を動員した。

第13代大統領選挙に続いて、1988年4月、第13代総選挙が行われた。最多得票を得れば総取りできる大統領選挙と違い、より支持率に近い結果が出る議会選挙においては、盧泰愚の民主正義党は過半数である150議席にはるかに満たない125議席しか獲得できなかった。解散がないため、この対策のためには盧泰愚はどこかの政党と手を結ぶしかなかった〔沈之淵

(2009:383)]。

この連合を最初に模索したのは、金泳三と金鍾泌であった〔朝鮮日報 (1990.01.07)〕。盧泰愚は金泳三—金鍾泌連合と連合するか、金大中と連合するかの二者択一を迫られた〔朝鮮日報 (1990.01.14)〕。盧泰愚は先に金大中との連合を模索したが、金大中に拒否されてしまった。金大中だけが政界の再編に否定的であった〔盧泰愚 (2011a:484-485), 金大中 (2011a:457-458)〕。これは金大中と他の三者とのこれまでの関係を見れば、ごく当然のことと言える。最も手を結び易いはずの金泳三単独とですら手を結ぶことができなかつた金大中が、それまで散々虐げられてきた軍事勢力と手を結べるはずもなかつたのである。

金大中に拒否された盧泰愚は、1990年2月、金泳三—金鍾泌連合と手を結んだ。民主化勢力であるはずの金泳三が軍事勢力である金鍾泌、盧泰愚と手を結ぶことにしたのは、金大中の平和民主党が70議席を獲得したのに対し、自身の統一民主党が59議席に過ぎず、その金大中への対抗心からであった〔イ・ダルスン (2012:410-412), 金容浩 (2001:229-232,249-250)〕。

この三党合同は非湖南、非金大中連合であった。つまり、盧泰愚 (慶尚北道, 新軍部)、金泳三 (慶尚南道, 民主化勢力)、金鍾泌 (忠清道, 旧軍部) の三者の相関関係は各々の金大中に対するそれよりも近かつたということである。一方、金大中の側もこのような包囲網から抜け出すために、彼らとはまた別の勢力との結びつきを強めた。この結果、金大中は元来保守的な三者と思想的相関関係には大きな差がなかつたものの、その過程を経て進歩性を高めていくこととなつた〔康元澤 (2012:177,184-189)〕。

小結

本章では、金泳三政権にいたるまでの時代を各アクターがどのように生きてきたのかを振り返つた。ここで、盧泰愚 (新軍部) と金鍾泌 (旧軍部)、そして金泳三 (旧派) と金大中 (新派) はそれぞれ同じ系統の出自ではあつたものの、必ずしも相関関係が近かつたとは言えないということが明らかとなつた。それどころか、金泳三は同じ民主化勢力である金大中よりも軍事勢力側と近い関係にあつたのである。

金大中は他者の正統性確立のために虐げられる存在となつた。そして孤立化し、先鋭化すればするほど、特定の支持層からはより熱烈な支持を獲得した。それが他者からは危険視され、より一層除外されるという悪循環となつていたのである。

第二章 金鍾泌人事をめぐる

第一節 金泳三大統領候補選出と金鍾泌代表最高委員就任

1992年3月24日に第14代総選挙が終了するとともに、次期大統領選への動きは開始された。

この総選挙では与党民主自由党 (以後 民自党) は選挙前の 194 議席から、1 議席だけとはいえ、過半数をも割り込む 149 議席にまで激減してしまった。各派閥の人数は民正系 113 (75.8%)、民主系 25 (16.8%)、共和系 11 (7.4%)¹⁹⁾ となった。2 年前の 1990 年 2 月 9 日に民自党が結党した際には、民正系が 127 (58.8%)、民主系が 54 (25.0%)、共和系が 35 (16.2%) で 216 議席²⁰⁾ だったことから比べると、民正系はほとんど変わっていないが、金泳三の民主系と金鍾泌の共和系が壊滅的な打撃を受けていることが分かる。

金泳三は党務を取り仕切る代表最高委員でもあるため、責任を取って辞職を求める動きが党内から出た〔朝鮮日報 (1992.03.28)〕。しかし、2/3 どころか過半数の議席も確保できないとあつては議院内閣制への改憲は夢のまた夢へと消え、大統領選を勝ち抜ける候補者の選出が求められた。特に金大中の民主党が大勝しているため、金大中に対抗できる候補として考えると金泳三しか選択肢は無く、むしろ金泳三の立場は強化された〔池東旭 (2002:187)〕。それでも党内で多数を占める民正系の候補は侮りがたかったが、最終的に第三勢力の立場であり、盧泰愚、金泳三に次ぐ党内の実力者である金鍾泌が金泳三支持を表明したことで、大勢は決した。この金鍾泌の金泳三支持は大きな貸しとなった。

5 月 19 日、民自党は全党大会を開いた。ここで、金泳三は全体の 66.6% の得票を得て民自党の次期大統領候補に選出された。同時に、民自党は最高幹部として総裁²¹⁾ に盧泰愚、最高代表委員に金泳三、最高委員に金鍾泌と朴泰俊^{パクテジュン}を再指名した〔朝鮮日報 (1992.05.20)〕。続いて、6 月 14 日には、金泳三の大統領選挙に備えるために、8 月に盧泰愚が名誉総裁に退き、金泳三が総裁に、金鍾泌が最高代表委員に就任することが発表された。大統領候補である金泳三が党ナンバー 1 の総裁に就任するのはやむをえないとして、金鍾泌が党ナンバー 2 に就任するとなると、民正系は党内の多数を占める最大派閥であるにもかかわらず、党のナンバー 1、2 の座を獲得できないということとなり、民正系から不満が出ていた。しかし、金泳三は他に構想はないとした。〔朝鮮日報 (1992.06.15)〕。

大統領候補選で金泳三と争った民正系の李鍾贊^{イジョンチャン}は、全党大会後離党し、大統領選挙に出馬する意向を示していたが、説得を受け、残留を表明した。この際の発言で「次期党代表は幅広い支持を受ける人がなければならない」としたため、反金鍾泌派は活気付くこととなった。もし次期代表最高委員に金鍾泌が選ばれなかった場合、金鍾泌と同じく最高委員を務めている朴泰俊が選ばれる可能性が高いため、反金鍾泌派の中心は朴泰俊支持派であった。しかし、民正系の中でも金泳三に近い立場をとる、キング・メーカー金潤煥^{キムユンファン}が金鍾泌支持を表明していたため、反金鍾泌の動きがこれ以上大きくなることも無かった〔朝鮮日報 (1992.06.30)〕。

その後も反金鍾泌勢力はくすぶり続けていたが、7 月 29 日、金泳三は自分が総裁に就任する際には金鍾泌を代表最高委員にすると強く示唆した〔朝鮮日報 (1992.07.31)〕。結局 8 月 28 日の党中央常務委員会にて金鍾泌が後任の代表最高委員となり、朴泰俊は最高委員職に留まるこ

とが正式に決定された〔朝鮮日報（1992.08.29）〕。

第二節 5・16擁護発言

与党が大統領選挙に突き進んでいく中、李鍾賛は再び翻意し、離党、新党を設立して大統領選に出馬した。これに朴哲彦や朴泰俊ら民正系の反金泳三派の人士が続いた。これまで見てきたように、金泳三と金鍾泌は一致団結していたため、反金泳三派と反金鍾泌派は被るところが多く、反金泳三派の離党により金鍾泌の立場も安泰になったかに見えた。

しかし、金泳三がいざ大統領に就任し、文民出身の大統領ということで、軍事勢力の排除を推し進め始めると、金鍾泌の立場は再び不安定なものとなった。これは金鍾泌が5・16軍事クーデターの首謀者であることと、同じく排斥される立場に立った民正系に動揺が広がったからである〔東亜日報（1993年3月2日）〕。金鍾泌攻撃は党の外からもやってきた。4月23日に行われる補欠選挙に向けての演説で、民主党のチェ・ジョンテク候補は「真の改革のためには、5・16軍事クーデターの主役で維新体制の2人者であった金鍾泌のように改革の障害になる旧時代の人物は政界から退かなければならない」と発言した〔東亜日報（1993年4月18日）〕。

金泳三は現職大統領として、初めて4月19日に4・19墓地を参拝した。この後、与党政府内に残っている軍事勢力士の発言が取り上げられるようになった。5月16日、5・16軍事クーデターの32周年目にあたるこの日、金鍾泌が5・16軍事クーデターの正当性を積極的に主張した。これに対し、野党民主党の朴スポークスマンは「金代表が政権与党の代表として5・16を擁護称賛したことは重大な問題」「金代表本人はもちろん金大統領もこの発言の真意に対して解明しなければならない」「文民政権の政権与党代表が軍事クーデターである5・16と朴元大統領を称賛したことは現政府の文民性に対して深刻な疑問を持つようにすることである」「現政府が文民政府なのか金大統領は説明をしなければならない」と強く非難した〔東亜日報（1993年5月17日）〕。普段慎重に発言をする金鍾泌がこのような過激な発言をした理由として、5・16軍事クーデターが12・12軍事クーデターに繋げられて、軍事勢力の清算が自身にまで及ぶことを予防したためとされた〔東亜日報（1993年5月17日）〕。

与党政府側はこの発言に対し、共和系は「当然の評価」、民正政系は「ノーコメント」、民主系は「時代を逆行する発言」とした〔東亜日報（1993年5月17日）〕。大統領府は困惑し、「私的な発言に過ぎない」としてこの問題がこれ以上拡大しないことを願う意向を示したが、内部では不快感が広がっていた〔東亜日報（1993年5月18日）〕。金泳三は就任100日目のインタビューで「5・16は明確にクーデターである」としながら、「政治報復はしない」とした〔朝鮮日報（1993年6月4日）〕。野党の民主、国民両党からは「金泳三大統領はクーデター関係者たちを『歴史の審判』に任せるのではなく自ら『歴史的決断』を行わなければならない」と罷免要求が相次いだ〔東亜日報（1993年6月4日）〕。これに対し与党からは「余所の党人事に口を出

すことは政治道義上ありえない」と反論がなされた〔東亜日報 (1993年6月5日)〕。

第三節 補欠選挙の敗北

このような状況の中、6月11日、補欠選挙が行われた。選挙区は江原道2選挙区と慶尚北道1選挙区の合計3選挙区で、前職は皆与党・民自党の議員であった。選挙結果は江原道の1選挙区で敗北し、2勝1敗であった。2勝は悪くない結果にも見えるが、4月に行われた補欠選挙では3議席すべてを与党が獲得しおり、与党は今回も全勝を予想していた。これに対し、民自党では縁故の無い土地での出馬だったためとしているが、高い支持率を誇っていたはずの金泳三陣営がそれをひっくり返せなかったこと自体が政権の限界を見せ始めていたと言えた〔東亜日報 (1993年6月12日)〕。

続いて、8月12日にも大邱と江原道の2選挙区で補欠選挙が行われた。江原道では勝利を取めたが、大邱では敗北した。前回敗北した江原道と違い、今回は与党民自党のお膝元である大邱であり、いよいよ金泳三政権の退潮が明らかとなってきた。

こうした中、党内から選挙戦の責任者である金鍾泌の更迭論が高まるのは必至であった。党代表の首を変えるためには全党大会を開く必要がある。しかし、全党大会は2年ごとに行われることになっており、その通り行くと来年の5月まで開かれない。このため、党内の反金鍾泌派は全党大会の早期開催を要求した。これに対し、金泳三は全党大会の早期開催を行わないとし、党内の調和を乱したとして、民主系のチェ前総長とキム・トゴン政務1長官に対し、警告と叱責を行った〔東亜日報 (1993年11月16日)〕。さらに金泳三は年始の記者会見で、費用面の問題から5月の全党大会を行わず、延期することを発表した。これは金鍾泌代表体制を維持するためのものであった〔東亜日報 (1994年1月7日)〕。

1994年8月2日、一年ぶりに補欠選挙が行われることとなった。今回の選挙は3選挙区でその中には大邱と慶尚北道という民自党のお膝元の地域が含まれていた。しかし、民自党はこの2選挙区とも落としてしまい、勝利したのは江原道の1選挙区だけであった。金泳三の全党大会延期で金鍾泌更迭論は下火になっていたが、この大敗北によって再び強くなることとなり、民主系は代表交代を流布した〔東亜日報 (1994年8月7日)〕。これに対しても金泳三は8月8日、金鍾泌に口頭で直接代表交代は無いと公言した〔東亜日報 (1994年8月9日)〕。はっきりと公言されたわけではないものの、11月20日の東亜日報でも、金鍾泌の表情が明るいので、最近になってまた金泳三から代表職留任の言質を得たのではないかとした〔東亜日報 (1994年11月20日)〕。

第四節 金鍾泌罷免

12月3日、金泳三は「大幅」な政府・党人事改編を行うことを発表した。この「大幅」の中に、金鍾泌の党代表職が含まれているのかどうかは不明であったが、その可能性が出てきた初

めての金泳三の発言であり、注目を集めた〔東亜日報（1994年12月4日）〕。さらに、12日には延期されていた全党大会を来年年始に行い、そこで党役員の改選を行うことを明らかにした〔東亜日報（1994年12月13日）〕。このような金泳三の態度を受けて、党内では民主系を中心に金鍾泌代表交替を既定事実化しようとする雰囲気が形成された。民主系のチェ・ヒョンウ内務部長官は「代表職は廃止しなければならない」と退陣を主張した。これまでも噂レベルでは広まることはあってもこのように党内からはっきりと退陣要求が出てくるのは初めてのことであった〔東亜日報（1994年12月14日）〕。これに対して金鍾泌が不快感を示すのは当然であり、党内のざわめきは留まるどころを知らなかった。

金泳三は金鍾泌の直接の問い質しにもはっきりと明言しないまま、1994年は暮れた。明けた1995年1月6日、金泳三は金鍾泌に代表職を退き新たに設ける副総裁職に就くよう要請した〔東亜日報（1995年1月7日）〕。副総裁は名誉職的な存在で、代表職のように総裁に代わって日常の党務に責任を負うものではなかった〔朝日新聞（1995年1月13日）〕。これに対し金鍾泌は党に残るか離党するかを決断を迫られた。離党するにしても第14代総選挙で共和系は壊滅的な打撃を受けていたため、金鍾泌についてきてくれそうな議員はごく少数しかいなかった。しかし、残留すれば金泳三に膝を屈するという屈辱を受け入れなければならなかった〔東亜日報（1995年1月14日）〕。とりあえず、代表辞任は避けられず、1月20日、金鍾泌は代表職の辞任を宣言した。これに対し、ムン・ジョンス事務総長ら民自党幹部は党へ残留を要請した〔東亜日報（1995年1月21日）〕が、2月9日、結局金鍾泌は離党を決断した。

第三章 金鍾泌の下野が意味するもの

第一節 後任人事と自民連結党

金泳三が金鍾泌を罷免するにあたって手を結んだのは、民正系の金潤煥であった。金泳三は党内の若返りを理由に金鍾泌の引退を迫り、党内の主導権を確立することを狙っていた。そのためには、党内多数派である民正系のキング・メーカー金潤煥の協力が必要だったのである。金潤煥にとっても「目の上の瘤」ともいえる金鍾泌の引退は歓迎と言えた。しかし、金鍾泌が代表職を退いてもその後任には同じ民正系の李春九が充てられ、また党ナンバー4である事務総長には、二期生議員に過ぎない金泳三の側近中の側近、キムドクヨン金徳龍が起用された。一方、金潤煥は政務第一長官に留め置かれた〔アエラ（1995年2月27日）〕。つまり、金潤煥は要注意人物として金泳三にマークされてしまったのだ。李春九は政治的野心がなく、金泳三としては後継者問題が浮上することを抑えられた。また金鍾泌と同じ忠清圏出身のため、忠清圏の引止めにも一役買うと見られた。その上金潤煥と同じ民正系なので民正系の勢力分断も狙えるという一石三鳥な人事であったのである。

一方、金鍾泌とともに民自党を離党したのはわずか5名だけであった。金鍾泌は3月30日、新党自由民主連合(以後 自民連)を結成したが、結成時の所属議員でも9名に過ぎなかった。しかし、5月16日には新民党と統合し、第3党としての地位を確立した。7月15日には無所属議員を加えて所属議員は22名となり、院内交渉団体となるなど急速に党勢を上げていた〔沈之淵(2009:427)〕。

第二節 第1回地方選挙と第15代総選挙

1995年6月27日に行われた第1回地方選挙は、これまで中央政府による任命制であった道知事と広域市市長の公選制が35年ぶりに復活する選挙であった。結果は自民連と民主党の大勝利であった。15自治体の首長選挙では民自党は釜山市、慶尚北道、慶尚南道の嶺南圏と仁川市、京畿道の5箇所であり、民主党は光州市、全羅北道、全羅南道の湖南圏とソウル市の4箇所、自民連は大田市、忠清北道、忠清南道の忠清圏と江原道の4箇所の確保とほぼ三つ巴の状態であった。また、それぞれの支持地域がきっちりと確保されていることも分かる。

この傾向は1年後の1996年4月11日に行われた、第15代総選挙でも同様であった。民自党から名前を改めた新韓国党は嶺南圏で76議席中51議席(67.1%)、金大中が民主党を割って新たに設立した新政治国民会議(以後 国民会議)は湖南圏で37議席中36議席(97.3%)、自民連は忠清圏で28議席中24議席(85.7%)を独占した。新韓国党の分が悪いのは、民主系議員の一部が自民連に流れ、大邱市では13議席中8議席を自民連が獲得したためである。この結果、新韓国党は改選前の147議席から139議席(-8議席)、国民会議は52議席から79議席(+27議席)、自民連は31議席から50議席(+19議席)へと変わった。これは国民会議と自民連の大躍進であった。金鍾泌が民自党を離党したとき手勢はわずか5名だったのが、1年後にはその10倍、議会の16.7%を占める一大勢力に飛躍したのであった。

第三節 全斗煥と盧泰愚の逮捕

この両選挙の間に起こったのが、全斗煥と盧泰愚の逮捕であった。1993年の金泳三政権が発足して以降、全斗煥・盧泰愚の両・元大統領の告訴・告発運動が起こっていた。検察は告訴を受けて調査を行ったが、1995年7月18日、「高度の政治的行為」であり、司法審査の対象とならないとして不起訴処分とした。

しかし、1995年10月、盧泰愚が大統領在職期間中に多額の不正資金を受け取ったことが明らかとなると、11月16日、盧泰愚は逮捕された。この盧泰愚の資金の一部は全斗煥から引き継いだものであることが分かり、11月24日、金泳三は、「5・18特別立法」の制定を民自党に指示し、12月3日、全斗煥も逮捕された。金泳三は歴史に任せようと言い、元大統領を処罰することはできないとしていた。しかし、それが一転して遡及法と目される法律まで作って逮捕

に及んだのは、過去の軍事政権との決別を明らかにしない限り、自らの政治基盤にも影響を及ぼし、1996年の国会総選挙はもちろん1997年の大統領選挙でも金大中に勝てないことが明白であったからである〔『アジア動向年報』(1995年版:51)〕。

終章

以上、ここまでで金鍾泌の人事をめぐる問題について過去、現在、未来から見てきた。ここで、改めて金泳三が金鍾泌を葬り去ろうとしていたのかどうかを検証してみる。

まず、金泳三が金鍾泌を排除したかった理由について考え直してみる。第一点として、考えられるのはその出自の問題である。普通に考えて軍事勢力側の人間と民主化勢力側の人間のそりが合うとは考えにくい。なにより、5・16軍事クーデターで金泳三は逮捕拘束されているが、金鍾泌はそれを行った側の人間である。次に第二点として、文民政府として正統性をアピールしている金泳三にとって、軍事勢力の首領である金鍾泌の存在が心地良いはずがないということがある。第三点として、金鍾泌は党内で金泳三に次ぐ実力者である。権力闘争の面からしてそのような人物の存在を快く思うはずがないという点である。

このうち、第一点の出自の問題であるが、それでは逆に民主化勢力の人間同士であればそりが合うのであろうか。同じ民主化勢力のボスである金大中との関係を見てみれば、どうしてもそのようには見えない。出自だけでその人間関係を定義してしまうのは硬直的過ぎるのではなかろうか。5・16軍事クーデターの被害者—加害者という関係についてであるが、確かに被害は受けたが、それほど大きな被害であったろうか。つらいところは金大中がかぶってくれたおかげで、金泳三への害はかなり軽かったと言えるのではないだろうか。金泳三は共産党ゲリラによって母親を殺害されている。これによって、金泳三は骨の髄まで反共主義者となっている〔池東旭(2002:196)〕。一方、金鍾泌によって、誰か近い関係の人が殺害されたであろうか。この「反共」というファクターからすると、軍事勢力らとの差別化から進歩的になっていっている金大中〔康元澤(2012:177,184-189)〕よりは保守的な軍事勢力の方が手を結びやすいと言えるのではなかろうか。

次に第二点の改革を阻害する立場にあったということについてであるが、これは現実的などころを見れば仕方が無いのではなかろうか。どんな大人物であっても自派だけで自由にできることは少ない。そもそも与党、大統領にならなければ自身の政策は実行には移せない。特に単独の勢力では金大中にすら劣ってしまう金泳三にとって、自身が権力の中核にたどり着くためには軍事勢力と結びつくほかないのであれば、そこは妥協点なのではなかろうか。また、本当に改革を阻害されていたのだとしたら、金鍾泌が下野した後で、旧軍部への清算を行っても良かったはずである。場合によっては、盧泰愚、全斗煥が逮捕されたときに、一緒に逮捕させて

しまうことも可能であったろう。しかし、実際には例えば各地で行った演説でも「30年にわたる軍事政権」というような表現で間接的に朴正熙時代に触れることはあっても、12・12と5・17の両軍事クーデターのように直接的に触れることはなかった〔『金泳三大統領演説文集』各巻〕。政府の公式資料集である『変化と改革 ―金泳三政府国政5年資料集 1』においても5・16クーデターに触れてはいるもののpp.23-24の1ページだけであり、その前の小節である4・19の2ページと、その後の12・12と5・17の両軍事クーデターの4ページと比べるとかなり分量が少なく、両小節の接続のためにだけ存在しているとも見えてしまう。4・19および12・12、5・17は盧泰愚、全斗煥の裁判にからむところでより一層詳しく扱われているが、こちらでは5・16軍事クーデターには全く触れていない。したがって、改革を阻害したとは言えないのではなかろうか。後任の李春九は12・12と5・17を引き起こした新軍部に属する人間である。もしこの点が本当に問題なのであれば、このような人事になりはしないであろう。

第三点の権力闘争の面からについても、排除したかったのであれば、盧泰愚、全斗煥とともに逮捕するなり方法があったはずである。また、金鍾泌を追い出すことで残った民主系と民正系は一致団結できるようになったのであろうか。実際にはそうはならなかった。盧泰愚、全斗煥の逮捕で民正系に動揺が広がりすぎたため、金泳三は金鍾泌離党直後には要注意人物であるからと、あえて後任には充てなかった金潤煥を代表委員職に就けざるを得ないところに追い込まれ、結局権力闘争は起こっているのである。

ここで、逆に、金泳三は本当は金鍾泌を排除したくなかったのではないかという前提に立って考えてみる。第一点目の出自の問題として、まず考えられるのは、盧泰愚政権前半期、四党体制の中で一番最初に手を取り合ったのが、金泳三と金鍾泌だったということである。金泳三一金鍾泌の連合は弱者連合であり、彼らだけが結びついて何もできないものであった。盧泰愚と手を結びさえすれば、単独でも過半数は確保できたのである。にもかかわらず最初に手を結んだということは、それだけ親和性の高い関係だったと言えるのではなかろうか。中京大学の佐道教授や静岡県立大学の小針教授らの前で語った『金泳三（元大韓民国大統領）オーラルヒストリー』および『金泳三（元大韓民国大統領）オーラルヒストリー記録』の中で登場する人物たちのほとんどについて金泳三は悪態をついている。例えば、金大中は「うそつき」〔金泳三（2008:50-51,88,104-105,144,183-184）〕であり、盧泰愚は「中心がない」〔金泳三（2008:20,37-38）〕、自身が引き上げた盧武鉉^{ノムヒョン}は「学がない」〔金泳三（2008:13,27,136）〕、同じく李会昌^{イフネチャン}は「変な人」〔金泳三（2008:136-138）〕といった感じである。

その中において、金鍾泌については「私はね、JP（著者注：金鍾泌のこと）さんに対してはあまり別に恨みがありませんよ。何故かといったらあの方はね、朴正熙の下で部長で悪いことをした集団でしょう、本当言って。しかし、あの方がその当時、私は朴正熙に反対したでしょう。そういう関係があるけれども、私が大統領になるとき、あの方が代表委員だったんです、党の

責任者だったんですよ」〔金泳三（2008:143）〕、「（インタビューアー：JPさんとは比較的、人間関係はよかったですか。）しかしね、私はあの人とは仲がいいとか、そういう関係ではないんですよ。それで、一年に一回ぐらい会うんですよ、あの人と。そうなのに、今度も会おうと思っていますよ。（インタビューアー：大統領を辞めた後も、一年に一回ぐらい会っているんですか。）そうです。私は、食事をしましょうと言ってね。私は本当の考えではあの人が、金大中とか盧武鉉とか、あんな人が大統領になるよりも、JPがなったほうが南北問題なんか、きちんとしたと思いますよ」〔金泳三（2008:145）〕と語っている。仲が良かったわけではないとしながらも、文面からは好意を感じられる。

確かに朴正熙時代は被害者—加害者という関係であったが、その後の全斗煥時代には二人とも同じ被害者側の立場であり、むしろ同志という認識があったとも考えられるのではなからうか。

次に三点目の強い実力者として疎ましく感じたのではないかという点であるが、これはむしろ逆なのではなからうか。盧泰愚政権期にともに与党にいて金鍾泌を間近で見て来た金泳三にとって果たして金鍾泌はどのように映っていたであろうか。拙稿『金鍾泌の政治権力闘争過程分析』では、「内閣制党書リーク事件」を通して、金鍾泌の力には限界があり、金泳三は金鍾泌をむしろくみしやすい相手とみなしたことが明らかとなっている〔拙稿（2012）〕。金鍾泌が強く訴え続けてきた議院内閣制改憲を一方的に破棄したにもかかわらず、自身を支持し、党ナンバー2として自身を支えてくれる人物である。そのような人物であれば、むしろ身近に置いておいたほうが良いと考えるのではなからうか。前掲のオーラルヒストリーでも「あの人の性格ではそうですよ。私が言ったら、聞くでしょう」〔金泳三（2008:144）〕と自身にとっては組み易い相手だったと捉えているような発言がある。

金鍾泌には、保守派と忠清圏からの支持がある。彼を排除すればこれらは失われてしまう。また、民正系の中の反金泳三派の求心点となることで、一大反金泳三勢力となる可能性があった。そもそも民自党は反金大中、反全羅道で団結して作った政党である。であるにも関わらず、金鍾泌を放出することで、むしろ逆に反慶尚道、反金泳三連合を作られる可能性を自ら生み出してしまうことになるのである。そしてそれは現実のものとなったのである。また、金泳三は金鍾泌に罷免を迫った際に「三金後退論」を出している。党外に放出するつもりなのであれば、後退論など持ち出す必要はなかったはずである。そして「三金」というところからも分かるように、その真のターゲットは金鍾泌ではなく、金大中であるはずである。ここで金泳三の最大のライバルが誰なのかを改めて思い起こしてほしい。三金後退論とは、再任の無い大統領である自身と金鍾泌が身を引くことによって、金大中も身を引かせることが真の目的であるはずである。であるにも関わらず、金鍾泌を野に放つことで、むしろ引退を宣言した状態であった金大中が政界に返り咲ききっかけを与えてしまっているのである。

こういったことを考えると、金泳三にとって金鍾泌は手元に置いておいた方がメリットが大
252（252）

きかっただけである。これが2年間外圧があったものの、金鍾泌を党代表から罷免しなかった理由と考えられる。しかし、自身の支持率の急速な低下や、予備選挙での度重なる敗北と地方選挙をはじめとする大選挙シーズンに突入することなどから党代表としてかばい続けることに限界が来たということであろう。

そして、党代表に代わる職として金泳三が考えたのが名誉職である副総裁である。副総裁に退けば、代表の時のように強く攻撃されることもない。副総裁になれば実権はなくなるかもしれないが、現状として共和系は非常に勢力が弱くなっており、また議院内閣制への改憲が否定されている状況では、金鍾泌が大きな力を振るう未来も見出せない。それであるならば、与党という大政党の顧問となり、一時の力は弱くなるが、後日の機会を伺いながら雌伏の時を過ごせる金鍾泌にとってもメリットであるはずである。

したがって、金泳三が金鍾泌を党代表職から罷免し、副総裁への就任を依頼したのは、先行研究にあるような金鍾泌を排除するためではなく、むしろ金鍾泌の力を党のために役立ててもらったためであったということが言える。

そして、党内人事であるため、どうしてもその理由も党内に求めてしまいがちになり、民正系や民主系との関係の中だけで分析をしてしまいがちである。しかし、上でも述べたように、党外にも目を向けたより幅広い見地からの分析が必要であったのである。

金鍾泌に顧問に退けとといったところで退くはずがないように思えるが、それは後世から見ているからなのと、金泳三には度々そのように人の判断を誤るところがあったということが言えよう。例えば、拙稿『韓国政治における国務総理制度の検討：IMF 事態への対応を通じて』では、その人選ミスがIMF事態を引き起こした大きな要因になったとした〔拙稿(2009)〕。これは金泳三自身も後にそう答えている〔金泳三(2008:249-251)〕。

以上のことから、金泳三は本当に必要として金鍾泌を保護し続けていたのであり、また単にそれが限界にやってきて、このままでは党内をまとめきれず、選挙には勝てないという判断から、前向きな理由で金鍾泌には顧問に退いてもらおうと考えたと考えられる。自分との関係ならそれはできると考えていたが、それが金泳三の読み違いで、金鍾泌のプライドを傷つけてしまい、党外へと追いやってしまう結果につながったという事が言える。

注

- 1) 民自党は3つの党の合同により誕生したことから、それぞれから最高委員を選出し、その代表として代表最高委員職があった。この役職は党創立以後金泳三が務めていたが、金泳三が盧泰愚の後を継いで党総裁に昇格したことから、順送りでも金鍾泌が代表最高委員となっていた。
- 2) 1993年4月9日の党綱領改定により、役職名は「代表最高委員」から「代表委員」に変更された。
- 3) 盧泰愚派。三党合同前の政党名である「民主正義党」に因む。同様に、金泳三派は「民主系」(「統一民主党」)、金鍾泌派は「共和系」(「新民主共和党」と呼ぶ。

- 4) 韓国中央部に位置する行政地域。正確には、現在では「忠清北道」「忠清南道」「大田広域市」の3行政区からなる地域のことである。
- 5) 韓国の政体を現す表現。現在の第六共和国まで6つが存在する。
- 6) 韓国の大統領選挙は建国以来、通して「第○代大統領選挙」と言う。
- 7) この当時の韓国の大統領選挙では、大統領とともに副大統領も個別に選挙で選ばれていた。このため、大統領の所属とは異なる党の候補が副大統領に選ばれる可能性があり、実際一つ前の第三代大統領選挙では李承晩大統領のもとで野党候補者の張勉が当選している。このときに非常に不便を強いられた李承晩は第四代大統領選挙でその再来が起こることを恐れていた。
- 8) 日本の2・26、5・15事件のように、韓国では何か大きな出来事があるとその日付で呼称することが一般的である。このため、例えば韓国史上最大の出来事である、朝鮮戦争はその勃発した日付から6・25戦争と呼ぶ。
- 9) 大韓民国の立法府の名称は、日本と同じ「国会」である。
- 10) 大統領選挙と同様に、国会の総選挙も建国以来通して「第○代総選挙」と言う。
- 11) いわゆる首相。この第二共和国の時期は議院内閣制であったため、実権は國務総理側にあった。その後第三共和国から現行の第六共和国では大統領制であり、実権は大統領側にあるが、國務総理職は一貫して存在している。
- 12) 軍人による政権も呼称が様々あるが、池東旭(2002)、木村幹(2008)、徐仲錫(2008)など多くの韓国政治に関する日本語文献において、この政権を「軍事政権」と呼んでいる。また、朝鮮半島の政軍関係論の専門家である宮本悟は、「韓国におけるクーデターの失敗と成功の要因」(宮本(2013))で、「軍事政権」という言葉について、注釈において「軍幹部が構成する委員会や評議会などによって成り立つ政権の意味」として用いたとしている。本稿ではそれに従った。
- 13) 若くて力強い40代、つまり金泳三自分自身が政治の先頭に立たねばならないという論。三金が年老いてくると、後進に道を譲るべきであるという、後の「三金後退論」「世代交代論」にも繋がる。
- 14) 韓国南東部に位置する行政地域。正確には、現在では「慶尚北道」「慶尚南道」「釜山広域市」「大邱広域市」「蔚山広域市」の5行政区からなる地域のことである。軍事勢力と金泳三の支持基盤が同じ慶尚道地域だと言っても、より正確には前者は慶尚北道と大邱広域市の北部、後者は慶尚南道、釜山広域市と蔚山広域市の南部が支持基盤である。
- 15) 韓国南西部に位置する行政地域。正確には、現在では「全羅北道」「全羅南道」「光州広域市」の3行政区からなる地域のことである。
- 16) 1979年の12・12事件で軍部の実権を握った陸軍士官学校第11期生を中心とする軍の少壮強硬派。全斗煥政権の中核を担った。これに対し、朴正熙政権の中核を担った金鍾泌らは「旧軍部」と呼ばれた。
- 17) 韓国南東部の慶尚道地域を指す。行政区画としての意味合いが強い「慶尚道」という呼び方に対し、「嶺南」はより地域性を重視した呼び方である。日本の「近畿」と「関西」の違いに似ている。これと対になるのが、韓国南西部の全羅道地域を指す湖南地域であり、この対立軸からすると韓国中央部に位置する忠清道地域は外れた立場にある。
- 18) 1980年、5・17クーデターをきっかけに光州市を中心に5月18日から27日まで展開された民衆闘争。鎮圧には軍が投入され、死者は政府発表では193人だが、1,000人を超えるとの説もある(『岩波小事典 現代韓国・朝鮮』岩波書店、2002年、p.71の「光州民衆闘争」(執筆担当 太田修)の項より一部抜粋)。
- 19) この派閥別当選者数は資料によって多少のずれがある。例えば、ハンギョレ(1992.3.26)では民正系

116, 民主系 24, 共和系 9, ソウル新聞 (1992.3.26) では民正系 114, 民主系 24, 共和系 11, 世界日報 (1992.3.26) では民正系 113, 民主系 24, 共和系 12 となっている。ここでは各資料の平均値に近い韓国日報 (1992.3.26) のものを用いた。

- 20) 三党合同宣言時には民主党は 59 議席で、合計議席数は 221 議席となるはずであった。しかし、合同を拒否した議員が 5 人出たため、民主系は 54 議席で、合計議席数も 216 議席となった。第 14 代総選挙後の議席分布との比較では宣言時の数を用いている資料も多いが、ここでは実際の新党結党時の数字を用いた。
- 21) 日本の自民党同様、党のナンバー 1 ポスト。大統領でもある盧泰愚が務め続けていた。
- 22) 韓国の第 16 代大統領。大統領選挙時には金大中の党からの出馬であった。元来は金泳三に見出されての政界入りであったが、三党合同に反発して金泳三の下を去った。
- 23) ソウル大学法学部を卒業後、弁護士や最高裁判事等を経て、監査院長に抜擢される。その後、政治の中枢に入り、金泳三大統領の下で国務総理、党代表、党総裁職を歴任。金泳三の後継として、ハンナラ党 (民自党の後進) の大統領候補となる。

参考文献

〔新聞等〕

朝鮮日報

東亜日報

韓国日報

ハンギョレ

ソウル新聞

世界日報

朝日新聞

アエラ

〔韓国政府公式資料〕

『変化と改革 — 金泳三政府 国政 5 年資料集 1 政治／外交／統一／国防』国政弘報処, 1997 年。

『金泳三大統領演説文集 第一巻』大統領秘書室, 1994 年。

『金泳三大統領演説文集 第二巻』大統領秘書室, 1995 年。

『金泳三大統領演説文集 第三巻』大統領秘書室, 1996 年。

『金泳三大統領演説文集 第四巻』大統領秘書室, 1997 年。

『金泳三大統領演説文集 第五巻』大統領秘書室, 1998 年。

〔日本語一般文献〕

拙稿 (2009), 『韓国政治における国務総理制度の検討: IMF 事態への対応を通じて』立命館大学国際関係研究科修士論文。

拙稿 (2012), 『金鍾泌の政治権力闘争過程分析: 1990 年～1992 年における民主自由党党内闘争を中心に一』立命館国際関係論集。

大西裕 (2004), 「韓国の場合: 地域主義とそのゆくえ」『新版 比較・選挙政治: 21世紀初頭における先進6カ国の選挙』, ミネルヴァ書房。

金玉斗著, 太刀川正樹訳 (1999), 『政権交代 —韓国大統領金大中が闘い抜いた謀略戦』 悠飛社。

金大中著, 金淳鎬訳 (2000), 『金大中自伝 —わが人生, わが道』 千早書房。

金大中著, 波佐場清, 康宗憲訳 (2011a), 『金大中自伝 (I) 死刑囚から大統領へ —民主化への道』 岩波書店。

金大中著, 波佐場清, 康宗憲訳 (2011b), 『金大中自伝 (II) 歴史を信じて —平和統一への道』 岩波書店。

金浩鎮著, 李康雨訳 (1993), 『韓国政治の研究』 三一書房。

金浩鎮著, 小針進, 羅京洙訳 (2007), 『韓国歴代大統領とリーダーシップ』 つけ書房新社。

金泳三 (2006), 『金泳三 (元大韓民国大統領) オーラルヒストリー』 中京大学。

金泳三 (2008), 『金泳三 (元大韓民国大統領) オーラルヒストリー記録』 中京大学。

木村幹 (2008), 『韓国現代史 —大統領たちの栄光と蹉跌』 中央公論新社。

倉田秀也 (1996), 「『三党合同体制』崩壊後の韓国政治 —世代交代論・改憲論議・地域主義」『国際問題』 第433号, 日本国際問題研究所, pp.30-44。

小谷豪治郎, 金石野 (1997), 『韓国危うし —朴正熙と金鍾泌を再評価する』 光文社。

徐仲錫著, 文京洙訳 (2008), 『韓国現代史60年』 明石書店。

池東旭 (1995), 「ポスト金泳三をめぐるビジョン不在の権力闘争」『世界週報』 76巻8号, 時事通信社, pp.40-45。

池東旭 (2002), 『韓国大統領列伝 —権力者の栄華と転落』 中央公論新社。

辻田堅次郎 (1995), 「『世代交代』議論で韓国政界の再編が始まる —金大中氏の政界復帰を牽制する金泳三大統領」『世界週報』 76巻8号, 時事通信社, pp.10-15。

服部民夫 (1992), 『韓国 ネットワークと政治文化』 東大出版会。

平岩俊司 (1996), 「『過去の清算』を図る金泳三の深謀遠慮 —96年韓国総選挙を控えた政争」『世界週報』 77巻1号, 時事通信社, pp.26-29。

宮本悟 (2013), 「韓国におけるクーデターの失敗と成功の要因」『聖学院大学総合研究所紀要』 第55号, pp.274-291。

文京洙 (2005), 『韓国現代史』 岩波書店。

森康郎 (2011), 『韓国政治・社会における地域主義』 社会評論社。

森山茂徳 (1998), 『韓国現代政治』 東大出版会。

柳峻相著, 朴斗鎮訳 (2002), 『ホームレスから大統領まで —韓国政界縦横無尽』 花伝社。

アジア経済研究所『アジア動向年報』 1991~1993年各版。

〔韓国語一般文献〕

康元澤 (2012), 「3党合同と韓国政党政治」『韓国政党学会報』 第11巻第1号, pp.171-193。

金容浩 (2001), 『韓国政党政治の理解』 ナナム出版。

魯淳圭 (2014a), 『韓国史9 全斗煥 盧泰愚 大統領』 韓国企業経営研究院。

魯淳圭 (2014b), 『韓国史10 金泳三 金大中 大統領』 韓国企業経営研究院。

盧泰愚 (2011a), 『盧泰愚回顧録 上巻 —国家, 民主化, 私の運命』, 朝鮮ニュープレス。

盧泰愚 (2011b), 『盧泰愚回顧録 下巻 —転換期の大戦略』 朝鮮ニュープレス。

地域主義と軍事 - 民主化勢力の勢力争いをめぐる金泳三の葛藤 (生駒)

- 沈之淵 (2009), 『重補版 韓国政党政治史 一危機と統合の政治』 栢山書堂。
- 尹正錫, 申命淳, 沈之淵編著 『韓国政党政治論』 法文社。
- イ・ダルスン (2012), 『現代政治史と金鍾泌』 博英社。
- イ・ヨンホ (2005), 『変革的リーダーシップの観点からの歴代国務総理リーダーシップに関する比較研究 一金鍾泌, 李漢東, 高建前総理を中心に』 漢陽大学行政大学院, 修士論文。
- イ・ビョンソン (1995), 「金泳三, 金鍾泌の“追い出し一対抗” 対決」 『月刊 マル』 104号, pp.32-35。
- 鄭允在 (2003), 『政治リーダーシップと韓国民主主義』 ナナム出版。
- チョン・テファン (2005), 「金泳三政権の登場背景と主要政治勢力の力学」 『韓国学研究』 第22集, pp.237-266。
- チェ・ピョングル (2007), 『大統領学 一大統領を見れば国が見える』 博英社。

(生駒 智一, 立命館大学大学院国際関係研究科博士課程後期課程)

The Dilemma of Kim Young-sam over Regionalism and the Struggle of Military and Democratization Groups: The Personnel Dispute over the DLP Post of Kim Jong-pil

Kim Young-sam was to be inaugurated as president with the support of two military groups, the Roh Tae-woo and Kim Jong-pil groups, on February 1992. Kim Jong-pil was No.2 of his Party.

As Kim Young-sam's background was civilian, he was requested to eliminate military power. Kim Young-sam was under pressure from the democracy group to dismiss Kim Jong-pil. Due to a power struggle, Kim Young-sam was also requested to take action for this dismissal from his group and the Roh Tae-woo group, another military group. He refused the request and defended Kim Jong-pil. However, Kim Young-sam suddenly dismissed Kim Jong-pil from the No.2 position of the party in January 1995. Kim Jong-pil left the party.

The purpose of this paper is to rethink about the actual condition of Korean politics in this era from the aspects of Regionalism and the struggle of Military and Democratization Groups by analyzing aspects of this personnel dispute.

In conclusion, it is necessary to thoroughly analyze all Korean politics even though it was the internal personnel affairs in the party and the actual condition of the Three Kims (Kim Young-sam, Kim Jong-pil and Kim Dae-jung)'s human relations has been brought to light.

(IKOMA, Tomokazu, Doctoral Program in International Relations,
Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)